2022年度 国語国文学専修 卒業論文ポスター発表

「鬼」について
～語義の変遷とイメージの変遷～

文19−284 佐々木妃那

【目次】

1. はじめに
2. 接頭語「鬼」の調査
3. 接頭語「鬼」の調査結果
4. イメージとしての「鬼」
5. 考察

1. はじめに

●ことば「鬼」の用法拡大

名詞「鬼」 → 接頭語「鬼」

名詞：「鬼嫁」「鬼教官」「鬼教師」などに接頭し、「鬼」としてのイメージに例えて名詞部を強調し、さらに評価性を持つ

●先行研究より、新しい接頭語「鬼」の使い方として

・若者言葉として形容詞に接頭し、程度を表す用法が現れている

例：「鬼面白い本」

また、ここに「鬼」のイメージ・評価性はない

・この場合、後接する語は形容詞でネガティブな語感を持つ

●問題点

・「鬼静か」「鬼親切」などの形容動詞との結び付きもあるのではないか

・「鬼かわいい」「鬼楽しい」などのポジティブな語感の形容詞との結び付きもあるのではないか

1. はじめに

●イメージの「鬼」の変化

日本昔ばなし

・・・筋肉質な身体、つの、虎柄のパンツ、金棒などを想像する

現代読まれる漫画

・・・人間とさほど変わらない容姿を持つ

●問題点

・目に見えるものとしての「鬼」も変化している
このことがことばの「鬼」の用法拡大において、若者言葉で
「鬼」がポジティブな語感を持つようになったことと関係があるのではないか

2. 接頭語「鬼」の調査

①『現代日本語書き言葉均衡コーパス：BCCWJ』を用いた調査

検索キー：語彙素「鬼」

対象年：1970年代～2008年

②『Twitter：高度な検索』を用いた調査

検索ワード：「は鬼」「が鬼」

対象年：2007年、2012年、2017年、2022年
対象日：「は鬼」4月13日、「が鬼」4月19日

上記条件で接頭語として「鬼」が作用する後接する語の品詞を分ける。
また、そのとき接頭語「鬼」がどのような意味で使用されているのかを
以下：田村(2005)を参考に分析する。

おに（鬼）・・・・・
①「鬼のような顔をした」の意。　鬼瓦
②「厳しい」「恐い」「ひどい」の意。　鬼監督/鬼軍曹/鬼将軍/鬼検事/鬼婆
③「大型の」の意。　鬼シダ/鬼アザミ/鬼百合/鬼グモ/鬼ヤンマ

3. 接頭語「鬼」の調査結果

BCCWJの調査

★初出：“鬼部長”といわれたマスコミの社会部長が、・・・（1978年）

●田村(2005)のような鬼の評価性を持つ使い方からは逸脱した鬼の評価性を持たない〈程度副詞的用法〉が現れ始めた

例：やはりL系は鬼性能だ・・・

後接する語の程度が極度に高い（または低い）ことを表す
鬼性能は高性能であることが理解できる

●名詞だけではなく、形容詞、1例のみではあったが動詞に至るまで使用がみられ、形容動詞は用例が確認できなかった

●形容詞では「速い」「美味い」というポジティブな語感を持つ語との結びつきもみられた

3. 接頭語「鬼」の調査結果

Twitterの調査

★初出：「は鬼」今日は鬼眠いわぁ・・・（2007年4月13日）
「が鬼」受付の方が鬼ｶﾜｲｲのです。（2007年4月19日）

●BCCWJと変わらない結果がでたがその汎用性は高くなっている
●名詞、形容詞、動詞、形容動詞に至るまで使用が確認できた
●ポジティブな語感を持つ語との結び付きが強くなっていることが分かった

参考文献：李(2019)と比較して
若者言葉では形容詞のみならず、動詞、形容動詞との結び付きも許容され、
ポジティブな語感を持つ語との結びつきが強くなっていた

4. イメージとしての「鬼」

●『「鬼」と聞いて思い浮かぶイメージ』アンケート結果より
イメージは「こわい」「強い」「赤い」「大きい」が大半を占め、
それらのイメージはすべての語で「昔ばなし」から来ているという
割合が多かった

ことばの「鬼」が持つイメージは「昔ばなし」の鬼の姿と結びついている

●『「鬼」の画像を見た印象』アンケート結果より
ことばの「鬼」のイメージは昔ばなしと結びついているとしたが、
『日本昔ばなし』の画像を見た印象では「かわいい」「滑稽だ」と答える割合
が多かった

ことばの「鬼」・・・『ももたろう』などの鬼が登場する昔ばなしにおいて
悪事を働く姿のみを連想している

画像の「鬼」・・・退治をされたり、弱弱しい一面を見せている

ことばと画像で印象が違うことが接頭語「鬼」の意味拡大に関係があるのではないか

5. 考察

鬼

は古くから人々のイメージによって姿を変えていた
中国では本来「霊魂」のことであったが日本では姿形があるように
自由な発想でイメージされ、かたちを成した

●「こわい・強い」というイメージを持っていた「鬼」は、現代に至るまで
『昔ばなし』から『漫画』などの媒体でさまざまな姿を見せ、
イメージの中和がなされているのではないか

●このイメージの中和が接頭語「鬼」が鬼としての評価性を持つだけでは
なく、評価性を持たない〈程度副詞的用法〉としても使われ始め、
名詞から形容詞、さらには動詞、形容動詞に接頭するように変化
しているのではないか

参考文献

佐々木翔太朗(2010)『日本と中国における「鬼」のイメージの差異について：マインドマップ調査の分析』山口大學文學會, 60, p61−73
田村泰男(2005)『現代日本語の接頭辞について』広島大学留学生センター紀要, 15号, p25−36
李知殷(2019)『若者ことば「鬼」の史的変遷』日本文化学報, 83, p161−175